

# NEWSLETTER

1996. 12. 12

立教大学全学共通  
カリキュラム運営センター

## 英語——ここが変わる

英語教育研究室員 鳥飼 慎一郎

来年度から全学共通カリキュラムが実施の運びとなる。この全学共通カリキュラムが実施されると、英語のカリキュラムのどこが、どのように変わるのであろうか。以下の6点にまとめてみた。

第1に、英語科目の学年配置であるが、これまでの英語のカリキュラムは、

1年次 英語1 (講読)	2年次 英語3 (講読)	1~4年次 自由科目
英語2 (口語英語)	英語4 (選択科目)	

となっていた。新しいカリキュラムでは、1年次と2年次に分けて各2科目ずつ配置されていた英語の必修カリキュラムを、1年次に集中させ、2年次以降には自由選択科目を置くことになる。

第2に、コース制を導入した点である。学生は、コミュニケーション・コースとリテラリー・コースの2つのコースのうち1つを入学時に予め選択できる。コミュニケーション・コースは英語での発表能力の育成を目的としたコースであり、リテラリー・コースは英語の受容能力の育成を目的としたコースである。

第3は、必修の英語カリキュラムの内容が大幅に変わる点である。新たに実施されるコミュニケーション・コースとリテラリー・コース内に設けられるそれぞれの必修科目の内容と目標をまとめると以下ようになる。

### <コミュニケーション・コース>

**インターアクティブ** 英語による口頭でのコミュニケーション能力の育成を目的としたクラスである。従来の「英会話」的なクラスと異なり、口頭でのコミュニケーションを様々な角度から分析し、その結果得られた口頭でのコミュニケーションに必要な語彙、文法、ノーション・ファンクション、ストラテジーを現実的な場面の中で網羅的に教えるクラスである。日常的な事柄に関する描写をはじめ、意見の表明、討論、説得といった高度なコミュニケーション能力の育成を目指すクラスである。

**リスニング** 口頭でのコミュニケーション能力の育成を、音声の聴解という面からサポートするクラスである。口頭でのコミュニケーションにおいて学習者が先ず直面する問題は、「相手の言っていることが聞き取れない」ということである。これは学習者の語彙・文法に問題があるというよりは、英語の音声に対する不慣れ、理解不足から引き起こされることが多い。リスニングでは、英語の音声の特質、話されるときに起こる様々な変化、日本語との差異を学習者に理解させ、リスニング能力の向上を図る。

**リーディング&ライティング** 口頭でのコミュニケーション能力の育成を、読む・書くという面からサポートするクラスである。現代において、話すための情報を得る目的で読むことは非常に多い。また、正確で論理的な話し方をするには、書くという作業は欠かせないものである。リーディング&ライティングでは、よきコミュニケーターとなるためのリーディングとライティングの技能の育成を図る。

### <リテラリー・コース>

**ランゲージ&カルチャー** 言語と文化という人間社会の根幹をなすこの2つのテーマについて講義形式で理解を深めるクラスである。このクラスは、講義、教材、提出物、口頭発表、レポート、試験等すべてを原則

として英語でおこなう。立教のキャンパスにしながら、英語圏に留学したのと同じような環境で言語と文化、そして英語の学習が可能となるクラスである。開講当初は困惑する学生が出るのが十分予想されるが、重要なのはそこにおける英語学習に対する新たな動機づけの発生である。このランゲージ&カルチャーのクラスを学生が理解し、及第できるだけの英語力を育成しようとするのが、以下に述べるリーディング&リスニングとアクティブ・リスニングをはじめとする目的別クラスの役割である。ランゲージ&カルチャーが目指す、内容のある事柄を英語で学習するという行為は、大学における英語教育の今後の方向性を示すものである。大学における英語教育の存在意義が大きく問われている現在、なぜ大学で英語を学習するのか、何のために学習するのかといった根本的な大学の英語教育にたいする疑問に十分答え得る画期的な試みであると思われる。

リーディング&リスニング 長い英語の文章を短時間で読み、その内容を理解する読解力の養成と、一定の長さを持ち、内容のある英語を聞き取る能力を養成するクラスである。日本人学習者が抱える大きな問題の一つに、英語の処理能力の遅さがある。リーディング・アサインメントが読み切れない、英語での講義が理解できないというのはその典型である。このクラスでは、英文速読法の基本的な技術を学習し、数頁にわたる英文の概要を日本語に訳すことなく理解できるようにするとともに、リスニングにおいては英語にとらわれないこと、話の要点についてメモを取りながら聞き進められるようにする。スピード・リーディングとリスニングを組み合わせた理由は、両者とも意味のまとまりである句や節を一つの単位として英語を理解してゆく言語活動である点が共通しているためであり、このようなメッセージの理解方法が英語を話すあるいは書く活動をする際に参考になるからである。

目的別クラス アクティブ・リスニング 映像を伴う英語の聴解力を養成するクラスである。現代は、日本にしながら海外の多くのテレビ番組を見ることができるといえる時代であり、映像メディアが果たす役割は大きい。視覚情報を伴うリスニングは、音声だけに比べて理解度が高いうえ、キャプションを利用することで大幅なリスニング力の向上を期待できるクラスでもある。プラクティカル・ライティング これまでの英作文のクラスは和文英訳の色彩が濃かったが、このクラスでは日本語に捕われずに、あるテーマについて各人のメッセージを英文で書き表すことを目標としたエッセーライティングのクラスである。所属学部への要請に応じ、後半は英語による論文作成の訓練も実施する予定である。ブレッジャー・リーディング 学生各自が自分の好きなものを読み進めるなかで、英語の読解力を養成してゆくクラスである。

第4は、ペアークラスが導入された点である。昨年度および今年度実施されているコミュニケーション・コースのパイロットクラスでも同一教員による週2回のペアークラスは高い評価を得ている。学生と教員とがお互いをよく理解しあい、打ち解けた雰囲気の中で集中して英語を学習するには、週2回のペアークラスは必要不可欠である。

第5は、統一テキストと統一テストがコアークラスであるインターアクティブとリーディング&リスニングに導入される点である。この統一テキストと統一テストは、立教大学の英語の必修カリキュラムの目指す内容と最低限の到達度目標を学内外に示すと同時に、及第点を与えるに至った学生の英語力を明確にする意味合いも持っている。しばしば問題となる担当教員間の評価基準のばらつきを解消し、評価の均一性を維持する一助となるはずである。

第6は、自由選択科目を質量ともに大幅に充実させた点である。必修カリキュラムが終了した後も、学生が興味と必要性に応じて英語を学習できるよう、あるいは各自の専門と連携した英語科目が履修できるよう数多くの自由選択科目をそろえた。このうちの何単位かは所属学部での卒業単位として認められるため、学習意欲の高い学生が数多く履修するはずである。この自由選択科目は、各学部の意見を取り入れながら、将来的には更に充実させ、今後の大学英語教育の柱であるESP (English for Specific Purposes) の科目群とし、英語の立教を復活させる大きな足掛かりの一つとしたい。

# 全カリ総合教育科目の現在と未来

総合教育科目担当部会

我々は、本学が大学大衆化という時代の波と大学設置基準大綱化という外圧を自らの問題として積極的に受け止め、未来に向けての新しい大学教育実践の先駆けとなるとの決意を確認し、全カリの教育目標である「専門性のある教養人の養成」に向けて、総合性ある授業の実現を目指して準備を進めてきた。我々は総合性を三点において理解している。第一は、学生の内面での教養の総合性。第二には、四年間一貫教育として責任を負う教員の教育意識における総合性。第三には、社会にアピールする大学全体のカリキュラムの、つまり、リベラルアーツ教育と専門教育との総合である。

もっとも、総合大学である本学では、学生が学部横断的履修をすればかなりバラエティに富んだ学習が期待できる。しかし、ただそのままではここに挙げた三つの総合性を実現することは難しい。非常に偏った受験科目しか真剣に勉強してこなかった多くの学生に、教養の内発的総合を期待するのは酷である。そのような学生達に、大学四年間の学習をあらかじめ総括し、個々の授業担当教員に総合的視点からの授業運営を要求するようなことができるだろうか。このような学生に、言語をも含めたりベラルアーツ教育のカリキュラムと専門教育カリキュラムの有機的連携と総合をどうして求められるだろうか。今、仮に学生に対し学部学科専門科目の学習ばかりを期待する向きがあるとすれば、それは学生の実態に見合った知的関心、見識の総合化を阻害することになりかねない。この意味で、我々総合教育部会では全学の教員の参加を求めて、全学共通カリキュラムとして、学習の総合性とは何かを学生に提示すべく、総合科目を企画している。現在までの到達点の持つ理念的意味を考えてみたい。

**総合A** 単独科目群としての総合Aではあるが、総合化の観点からまとまり易いテーマ別編成とし、科目の多様化を進め、学生の関心の広さと共に深さにも対応できるものとした。

- 1 思想・文化** 本学の建学の精神であるキリスト教の思想、古今東西の哲学思想、さまざまな地域の文化と思想、身体を通して環境に触れ、身体そのものの知を深める考え方などを学ぶ。多様な文化と思想を学ぶことを通して、日本人に欠けがちと言われる批判精神の涵養も行う。 文学部系科目 86コマ
- 2 歴史・社会** 他者との時間空間的接触の中での人間生活という観点から人間理解を目指す。「歴史の扱い方」に主眼を置く歴史科目、社会の仕組みとその現実の出来事を学ぶ多様な社会科学科目が展開される。文学部系科目 22コマ、社会学部系科目 18コマ、経済学部系科目 4コマ、法学部系科目 24コマ
- 3 芸術・文学** 「概念」で捉えにくい領域を扱い、そこに表現される人間や歴史的、社会的コンテクトを考察する。古今東西の芸術及び文学作品理解を深める芸術・文学関連科目だけではなく、日本語能力向上を目指す「コミュニケーション」、広義の芸術・芸能を扱う「表象文化」という科目も置かれる。文学部系科目 72コマ
- 4 環境・人間** 人間が環境と共存しなければならないという事実が端的に鮮明となっている時代を踏まえて、環境と人間の相互関係を解明するという観点から、化学・生物学及び心理学の方法を用いて環境並びに人間を解明することを目指す。文学部系科目 38コマ 理学部系科目 28コマ
- 5 生命・物質・宇宙** 人間の住む世界とは何か、それを構成するものは何か、そこにはなぜ生命体が存在するのか。これらの疑問が現代の人間の生活にどの様に関係するか考えることを目標とする。理学部系科目 36コマ
- 6 数理** 数学の歴史的発展や理論展開を学び、併せて人間生活の形式をシミュレーションして人間と数理の世界との関連を自覚する。 理学部系科目 15コマ

**総合B** 同じ一つの問題をめぐる複数の専門分野から提供される複数の見方を一つの科目の中で総合しよ

うとする。複数学部教員の共同授業の可能性もあり、学生は学問的総合を目の前に見ることができる。専任教員の講義あり、特別ゲストの講演あり、シンポジウム、討論会、映画、展覧会、体験実習等、多様な授業法が駆使される。

科目名 「企業社会と豊かさ」「進化」「人権・生命・環境」「アジアを知る」「科学と人間」「体験学習－環境と人間」「メディアとスポーツ」

**情報** 情報リテラシーを身につけ、情報技術を使いこなせるようになることが目標。コンピュータの機能、ハードとソフト、情報表現、コンピュータの社会的役割、情報技術固有の発想法、情報処理、情報倫理などのテーマを個々の科目の性格に合わせ、講義、実習を取り混ぜて考え、身につけて行く。

**スポーツ実習** 健康を維持増進させるための科学的知識を理解し、スポーツの実践を通して運動の習慣化を図り、健康な日常生活の基礎を作ること。スポーツの優れた国際性や文化的側面を理解し、その実践を通じてバランスのとれた理性や的確な判断力を養成すること。以上の二点が主たる目標となる。

以上が担当者もほぼ決まり1997年度開講予定の総合科目の各カテゴリーの理念である。とにもかくにもここまでこぎつけたことは大きな意義を持つと言わなければならない。関係者各位に心から感謝申し上げる次第である。しかし、これで頭書の総合性の実現できるかと言われれば、残念ながら未だ不十分と言わざるを得ない。そもそも、総合A全体をまとめる理念とその方法が示されていない。これを具体化しなければ学生に総合化への道を提示したことになる。これを行うためには全学部の教員の積極的参加による、専門領域を越えた議論がもっとなされなければならない。しかし、現状では積極的参加はごく少数にとどまる。文学部系科目の218コマ、理学部系の79コマに対して、経済学部系の4コマ、社会学部系の18コマ、法学部系の24コマという配分は現状の困難を象徴している。これでよいのだろうか。立教のリベラルアーツとは何か、学問的教養の総合性とはどのようなものか、もっと全教職員に考えて欲しい。総合部会は旧一般教育部解体の意味を、科目と人員の存在意義の自明性が撤廃されたことと受け止め、科目の必要性を一つ一つ理念的に説明し、総合性実現のための専任教員の適正な配置をも念頭に入れて、大いなる痛みをも甘受しつつ、全学的見地から人事要求内容をまとめてきた。それに対し、これまでは、大学当局が理解を示さず、一貫して黙殺の態度をとり続けてきたことは、総合科目の未来にとって極めて遺憾である。総合性実現に向けて、社会科学系学部教員にもっと出講し易い環境を作り出す当局の施策が望まれる。

また、総合Aに総合性の理念が欠如していることに関して、各学部の考え方が明確でないことも指摘されよう。各学部が総合Aの各カテゴリーからどのような総合性を引きだそうとしているのかがはっきりしていない。全カリは学部のカリキュラムの一部である。各学部は自信を持って自らの全カリ理念を前面に出して欲しいし、その理念を運営センターの議論の場に問うて欲しい。学部間の緊張感こそが全カリ運営センターの活力だからである。この緊張があってこそ初めて、科目配分の不均衡が是正され、立教のリベラルアーツが具体化され、それがより質の高い総合性へとまとめられ収斂してゆけるのではないだろうか。

さらに現在の問題点をもう一つ挙げれば、総合科目に言語科目担当予定の大学教育研究部教員の合力がないことである。これは制度上の問題でもあるが、総合部会は言語部会とカリキュラム作成過程で協力し合うことはなかった。従って未だにこれらの教員の総合科目担当のルールもできていない。言語科目をも含めた立教のリベラルアーツの理念形成に際して、全学的見地から検討されることが必要だろう。

最終的に、頭書の三つの総合性を実現し、総合科目を発展させてゆけるかどうかは、一人一人の教員の意識が大学教育の総合性に向けられるかどうかにかかっているようにも思われる。そのためには、全カリ総合部会の運動が一部の教員による一方的な理念の押しつけにならぬよう、可能な限り情報公開をし、全学的規模で意見交換もできるようなネットワークづくりが必要だろう。それこそが、未来の総合科目の総合性を確かなものにしてくれるのかもしれない。

## う ち わ 話 し

経済学部運営委員 亀川 雅人

1997年3月、パンキョウが死ぬ。正確には、脳死状態というべきであろうか。96年度以前の入学者は、まだしばらくの間、この瀕死状態のパンキョウとつき合うわけである。しかし、97年度の新入生にとって、パンキョウは全カリに生まれ変わっている。

全カリの実施は、いろいろな意味で立教の将来を左右する大改革である。各学部が、協力して共通のカリキュラムを構築する。すばらしいことである。しかし、そんなことが本当にできるのであろうか。それぞれの学部カリキュラムでさえ、喧々がくがく、十分なコンセンサスを得られないでいるのに、学部を越えたカリキュラムを組むなんて。

しかし、97年度より、その成果が実施されるという。牛歩のごとく前進してきた立教大学にしては、なんとすばやい対応であろう。しかし、その実態は理想とは程遠い。愚痴になるが、これは「うちわ話」である。脈絡もなく好き勝手に愚痴をこぼしたい。

まず、全カリ運営委員会の制度。メンバーは、任期制である。わたしも、前任者より引き継ぎ、何もわからないまま委員会に出席することになる。もちろん、「何もわからない」というのは語弊がある。前任者からは、全カリの制度や、これまでの経緯を詳細に伺った。しかし、やはり、わからない。この無責任な任期制は、立教の得意とする民主的な手続きというやつである。仕事が多くなる反面、誰もが他人の仕事には無関心になる。大学のトップも、学部執行部も全カリの精神や具体的な進行状況、必要な資源を知らないまま、一介の委員に任せることになる。民主的な運営とはそういうものである。結果がでるまで、そのプロセスには口をはさむべきではない。委嘱された委員は暗中模索の状態で、長い長い会議に出席することになるのである。中途半端な責任感をもって。

その立場は微妙である。経済学部から選ばれた代表者であり、また旧一般教育部教授会メンバーのような立場に立つ。学部では、全カリ運営委員は、他の委員と同じ一つの職責であるが、全カリ運営委員会は学部教授会と同様の機能を担う。それゆえ、全カリ運営委員は、二重の仕事を負担させられるのである。学部で全カリを含むいくつかの委員を委嘱され、全カリでも委嘱される。私の場合、全カリでは教務委員と履修要項プロジェクトの委員を委嘱されている。まるでコウモリのようなものである。

運営委員は、半年もすれば全カリがどのようなものであるかを理解できるようになる。当然である。学部教授会以上に回数も時間もかけているのだから。たとえば、今年4月から夏休み前までに全カリ関係の会議（全カリ運営委員会、構想小委員会、教務委員会、履修要項委員会など）で26回、後期に入って現在（10月30日）までに10回という多さである。一回の会議は、平均して4時間程度であろうか。11時を過ぎることもある。貴重な時間を消費しているのである（追伸：秋休み以降、8日間に6回の会議があった）。

なんと会議が多いのであろうか。学部等の会議を含めれば、半年で合計70回ほどになる。夏休みを除けば、4カ月に70回。これは異常としか言えない。私のように知識の蓄積をもたない研究者にとってはつらい。勉強しなければならないという強迫観念が残っているうちはよいのだが。最近、インプットがほとんどなくなってしまった。読み物といえば、全カリの履修要項（案）である（笑い）。来年、全カリの任期が終了したら少しは勉強できるのだろうか。大学の行政はどんなに頑張っても評価なんてされないし、自分自身を満足させることもできない。失敗したときだけスポットライトを浴びるのである。

完全に愚痴になってきたが、まだまだ。徒労に終わる可能性を残しながらの全カリ会議は、しんどい。大学トップが資源その他の枠組みを示さないため、どんなに時間をかけて審議しても、徒労に終わることを覚悟しなければならない。直接の利害に関わらない限り、あるいは間近に迫らない限り関心をひくことはない。前任者も同様の苦勞をしてきたのであろう。人がいない、教室がない、学部カリキュラムにしわ寄せがくる、

といった問題に直面するまで無視されてきたのである。誰もが薄々気がついていながら、面倒な議論は敬遠され続け、最後になってコウモリに聞くのである。「お前は、鳥か動物か、」と。これは組合も同じ。

総合教育のカリキュラムを考えてみよう。なぜ人文関係のカリキュラムに偏っているのでしょうか。パンキョウの専任教員が縄張りを確保したのであるか。確かに、これは否定できない。旧一般教育の専任教員に、人文科目担当者が多いのは事実である。彼らが、新しいカリキュラムを作成するとき、旧来の科目体系に引きずられるのは当然である。しかし、もっと重要なことは、一般教育部の解体が決まった時点で、各学部教授会の関心が、学部カリキュラムや分属教員の処遇に集まり、教養教育カリキュラムの再編成を軽視したことである。専ら旧一般教育の教員が、誰も関心を示さないパンキョウの再編に取り組むことになったのである。その結果、出来上がった総合教育カリキュラムは、人文系に偏ってしまった。新たな専任も、非常勤の枠さえ制限された状況である。言語教育との資源争奪戦に敗れたのであるから仕方ない。しかし、全カリの会議では、しばしば恨みつらみが顔を出す。学部代表の運営委員は、静か(?)に見守るだけである。

理想的な総合教育カリキュラムは、人文、社会、自然のバランスがとれたカリキュラムである。各学部の専門教育で不足する幅広い教養を提供するものでなければならない。自らの学部教育に不足する知識を認識し、これを他学部に要請するカリキュラムである。総合大学の真骨頂というところか。もちろん、各学部が無理なく、公平に負担できるカリキュラムでなければならない。「応分の負担」という全カリではよく使われる言葉である。しかし、これが曲者である。各学部間の専任教員の数、担当時間数などのバランスが全くとれていないからである。しかも、担当時間数に至っては、その計算方法すら異なるのである。各学部の独立採算制を採っているわけでもないのに、なんといい加減なことか。

結局、振り出しに戻ってしまう。専任教員が少ない学部は、総合教育カリキュラムに口出しできない状況にある。口出しすれば、自らの負担増になると危惧するのである。応分の負担ができる理想的なカリキュラムをつくるには、各学部間の資源配分がバランスのとれたものでなければならない。これは、全カリを越えた全学レベルの資源配分問題である。学部間資源配分が全カリ運営委員会で決定されるとなれば、運営委員には荷が重すぎる。

愚痴を言うには紙幅が足りなかった。確かなことは、97年度からの全カリは、瀕死状態のパンキョウであり、イースターではないということである。悲しいフランケンシュタインというところか。蘇生手術(実験?)が成功するか否かは、立教大学の教員ひとりひとりに委ねられている。任期制の囑託委員(全カリ委員)のみが執刀医では頼りないではないか。

さて、時間がなくなった。全カリ履修要項の勉強に戻らねば……。

~~~~~

#### 【編集後記】

全カリNEWSLETTERの5号をお届けします。来年四月から実施される全カリは、旧一般教育課程の全面改革を意味しており、立教の試みは学外からも大いに注目を集めている。この種の改革というと、どこかの大学で考案されたモデルに若干の変更を加えて良しとすることが多いのであるが、立教はまさに模索の繰り返しで自ら新しいモデルを苦しみながら産みだしてきた。まずはそのことを評価して欲しいというのがこれに関与した者の率直な気持ちであろう。当初からこれに関係したすべての者の「愚痴集」を集めたら大変な量になるであろう。苦労が大きかっただけに、また十分に議論を重ねてきただけに、全カリの欠点も課題も現時点で明らかになっている。しかし、難産ではあってもすくすく育っていけることを実感できるのは幸いである。本号には言語科目と総合科目の両者の要領のいい解説が掲載されている。立教人のすべてに熟読してもらいたい。

(達)

## 研究室だより

諸言語(中国語)教育研究室 谷野 典之

日本における中国語教育は新時代に突入しつつあります。それを私は密かに「チャイ語の時代」と呼んでいます。それは戦前の「支那語」の時代、戦後の「中国語」の時代に続く、第三の時代です。私が立教の学生の口から「チャイ語」という呼称を耳にしたのは三、四年前のことです。咄嗟に「なんという嫌な呼び方だろう」と感じたものです。もちろんかつての中国に対する蔑称を連想したからです。ところが学生は、そうした中国に対する蔑称がかつてあったという歴史認識すら持ち合わせておらず、単にそれを「チャイナ語」の略称として使っているだけらしいと気づいたとき、私たち「中国語」の世代の足もとで、すでに新しい時代が始まっているのではないかと思い始めたわけです。

そこで思い立って、この「チャイ語」という呼称がいったいつから始まったものなのか、この呼称に対して学生はどのような意識を持っているのかを調べたことがあります。その結果わかったことは、80年代後半、87年ころにはすでにこの呼称が始まっており、それは「中国語」という、よくも悪くも政治的な匂いのする呼称に違和感を感じる世代の、無意識的な自己表現ではないかということでした。

80年代後半といえば、中国の改革開放政策の進展に伴って、中国語学習者がうなぎ登りに増えていった時期に一致します。つまり「チャイ語」は中国語大衆化時代が求めた新しい自称ではないかと思うのです。そしてこの大衆化の底流には、言うまでもなく中国語の実用性に対する漠然とした時期があります。大学はその期待に応える教育を行なうべきです。しかし、その一方そうした実用言語としての側面のみ寄りかかった教育の行く先に、かつて中国語が実用言語としてのみ扱われた時代の再来、「新・支那語」の時代があるのではないかという危惧が感じられることも確かです。かと言って再び「中国語」時代の教養言語的教育に戻ることは時代の逆行でしょう。

こうした「チャイ語」時代の中国語教育がどうあるべきか。新カリキュラムの策定に当たっては、この問題を避けて通るわけにはいきません。元来、中国語は外国語教育の裏街道でした。自転車か、せいぜい馬車が行き交う程度のこの裏街道に、いまや大量の自転車が押し寄せています。信号も立体交差もない田舎道は文字どおりの大混乱です。語学教育としてのインフラストラクチャがあまりにも未整備なのです。中国語教育に関する学会はもとより、教授法の開拓すら緒に就いたばかりの段階です。辞書や参考書類も、ようやく優れたものがぼつぼつ出回り始めたといったところです。

本年度、中国語研究室では呉悦先生、池田巧先生というお二人の語学専門家を新任としてお迎えし、本学における中国語教育のインフラ整備に乗り出したところです。呉先生は中国語の歴史的变化という視点から文字・語彙・文法に造詣が深く、また池田先生は音韻学の立場から中国各地の方言を研究されています。お二人を合わせると、中国語を時間軸と空間軸でとらえ、立体的な中国語像を描き出すことができるわけです。またコンピュータを使った中国語教育という新しい分野の開拓も池田先生を中心に研究を始めています。けれども教授法の研究も進んでいない日本の状況の中で、立教独自の教材開発やテスト開発を始めようとするれば、いかんせん三人のスタッフでは限界があります。今年度、専任教員一名の増員を申請しましたが、11月23日部長会で却下されました。すでに中国語が英語とならぶ重要な国際言語となりつつあることを考え合わせてこの決定はいかにも残念でなりません。新時代の中国語教育を開拓するために、戦力の補充を待ち望んでいます。

### 【人事変更(追加)】

日本語教育研究室に新たなメンバーが加わりました。

日本語教育研究室員 田中 望(社会学部)

## [ 声 ] の欄

### 全カリの陣痛

「今回のカリキュラム改訂は、大学設置基準が改正されて一般教育課程と専門教育課程との区分に関する規制が外され、この二つの課程を大学教育総体のなかに改めて位置づけ直す作業を大学として独自に行わざるを得なくなった関係で行われたもので、そこでは、立教大学としての教育理念が改めて問い直され、その実現のために、立教大学の現有する資源が大きく再組織された。議論すべきことが多く、その一点一点に議論が百出して夜遅くまでの会議が重なった。時間的な制約もあるなか、まずはよくやってきたと自負している。理解を得たい。」

法学部生向けの「法学周辺」という雑誌に全カリの解説が欲しいというので書いた原稿の末尾です。読み直して、改めてこれが実感だと思いました。注釈をつければ、私たち並の運営委員はまだいいほうで、部長や部会長はほんとうにたいへんだったと思います。

全カリへの改訂には、新しいカリキュラムを作るだけでなく、旧いカリキュラムを壊す作業が必要でした。旧いカリキュラムに慣れ親しんできた教員たちにとって、それはたいへんな苦痛だったに違いありません。その苦痛が私たち学部選出の委員にひしひしと伝わってきたのは、ほかならぬ委員会の審議を通じてでした。

「再組織」されたのは人的資源でした。人的資源の再組織には、その再組織される「人」たちの苦痛が伴います。全カリは、その苦痛を、いうなれば陣痛として生まれたのでした。再組織に伴う苦痛は、それだけではありませんでした。一般教育部教授会がなくなり、そこで決められていたカリキュラムは全カリ運営委員会で決められることになりました。しかし一般教育部教授会に出ていた教員の大部分は、全カリ運営委員会には出ないことになりました。運営委員会の下部組織である構想小委員会には、研究室の主任が出ます。主任はもちろん研究室員の意見を聞きます。しかしその研究員は、運営委員会によって選ばれた一部の教員に過ぎませんでした。再組織は多分に他律的に行われたのです。これがまた、苦痛を上塗りしたようでした。

これらの苦痛は、全カリへの移行にとって避けられないものだったと思います。革命は無血ではできないといったら比喩が過ぎるでしょうか。その革命もどうやら軌道に載りそうです。乗ったら、不条理な苦痛を強いられた仲間の立場を一度よく考えたいと思います。

(彦)

### — 今号のお題「全カリ」 —

隠居：どうしたい、八つぁん。久しぶりじゃあないか。  
八五郎：ご隠居もう、忙しいの、忙しくないのって…。

忙しいんですけどね。ところで、最近学生が全カリ全カリって騒いでますけど、何なんですか？

隠：来年の1年生から「全学共通カリキュラム」というのが今までの「一般教育課程」に変わって始まるんだが、今の学生、要するに来年の2年生以上が自分達はどうなるんだと不安に思っている、とそういうことなんじゃあないかな。

八：なるほど。「全学共通カリキュラム」だから全カリね。学生は何でも端折るからねえ。一般教育ならパンキョウ、フランス語はフラ語、中国語に到ってはチャイ語、チャイニーズだから。

隠：馬鹿な事を言ってるんじゃないよ。で、さっきの話だけれど、来年の2年生以上は基本的には変わらない、「一般教育課程」なんだ。人文・社会・自然の3分野をとることには変わりがない。2年生の必修語学は通年で置かれるし、体育実技2も保健体育講義も変わらない。語学・体育の再履クラスも今まで通りだ。

八：じゃあ、何もかわらないんで？

隠：いや、一般教育科目の科目が変わる。科目名、科目内容も変わるし、一番違うのは今まで通年4単位だったのが半期2単位になるんだ。各科目3分野に分けられるのは変わらないから、不足単位をそれで埋めていくわけだ。

八：1年生とは別々に授業を受けるんで？

隠：別々じゃあないよ。同じ授業を聞いても1年生は全カリの総合教育科目で、2年生以上は一般教育科目、つまり、3分野科目になるんだ。

八：難しいこたぁよくわからねえけども、要するにあれだ、入口は別々でも中に入ると一緒というわけだ。露天風呂でそういうのが時々あらぁね。

隠：妙な例えをするなよ、おい。

八：へ、怒られちまった。だから、2年生以上の学生は1年生が全カリになるからって、カリカリするこたぁ無え、大丈夫だと…………。

お後がよろしいようで。

(志ん朝が聴きたいF)